



はじめに

「かたち」という言葉を直感的に受け入れることは容易であるが、では「かたちって何？」と聞かれたら説明に困る。小さい頃から普通に使ってきた「かたち」という言葉の意味を理解していないことに気付き愕然とする上に、私は「生きもののかたち」を研究しているので、その研究対象を説明できないのでは研究者としてはきわめてマズイ。だからと言うのも変な話だが、「かたち」について少し考察しておく気になった。

「かたち（構造）」と対をなす言葉として「はたらき（機能）」がある。これらはどの様に異なるのだろうか？まず思い当たることは、「かたち」を対象とする場合には時間を止められることであろう。形態学、すなわち生きもののかたちを解析する学問の基本的な方法論は「固定」である。ホルマリンなどで生物試料を固定し、動かなくなったものを染色したり切ったりしてその構造を「見る」。逆に「はたらき」は、決して時間を止めることができない。はたらきとは、一定時間を挟んで起こった差異を見るからである。もし、時間だけが経過しても差異が生じない時、そこには「はたらき」はない。もし仮に、

※ 1：ゴットフリート・ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) (1646-1716)

哲学者、数学者、科学者、政治家など幅広い分野で活躍した学者・思想家。哲学者として「モノイド」や「予定調和」という用語は有名。

一定時間が経過しても、世の中の物事すべてにまったく差異がない場合には、時間そのものが止まっていることと、論理上は、なるはずである。少なくともライプニッツ*1はこう考えたらしい。

脳の中で「かたち」を認識するのは「視覚の情報処理系」であり、「はたらき」を認識するのは「聴覚の情報処理系」であるといわれる（図1）。これはすなわち、絵や写真などの視覚情報には時間が存在しないのに対して、音情報は空気の震えであり、必然的に時間経過を要求することによるのであろう。さらに、聴覚情報と視覚情報を処理する脳の領域は物理的に離れており、互いの情報の交換ができ

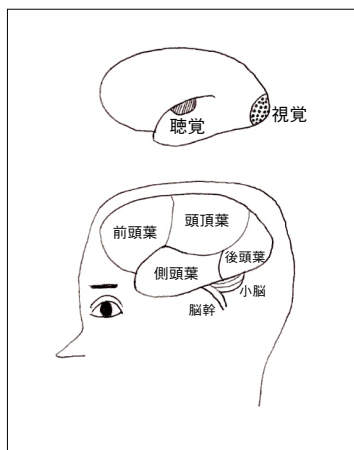


図 1. 脳の情報系

ないので、本質的には同一の現象を考える時にも視覚情報として処理すると「かたち」を考えることになり、聴覚情報として処理すると「はたらき」を考えることとなるそうだ。本質的理解には、「かたち」と「はたらき」のどちらか一方だけの解析では常に不十分で、したがって「形なき働きは幽霊」であり「働きなき形は死体である」というのである。飛んでる矢は止まっていたり、アキレスは亀に追いつけなかったりするゼノンのパラドックス^{※2}は、聴覚情報として処理されるべき「運動」を視覚情報として処理した結果として不可思議な逆説を作り上げたと言えるのかもしれない。

科学的思考も突き詰めると哲学の領分に入ってしまう。しかし、哲学も古くから数学の影響を如実に受けてきている。「かたち」を扱う哲学としての「構造論」は比較言語学に端を発しているが、学問的には数学に最も近いと言われている。まあ、言語と同様に数学もそれ自身が論理体系であるので、これは至極当然のことかもしれない。いまから「かたちとは何か」「意味とは何か」について私は考察する。これは、先人達の偉業を私なりにかみ砕いて記載し直そうとする小さな試みである。構造論の出現を受けて人類学や心理学など多方面の科学領域が新たな世界へと踏み込むことができた様に、かたちを考え

※2：ゼノンのパラドックス

「アキレスと亀の競争」

アキレスがハンディキャップをつけて、亀のいる地点から後の地点からスタートする時、アキレスが亀を追いこすには、まず亀の出発点に達しなければならない。その時、亀はその先の地点にいる。以下同様である。アキレスが亀を追いこすには、一つ一つ無限の地点に触れなければならない。アキレスは永遠に亀に追いつけない。

「飛んでいる矢は止まっている」

飛んでいる矢は止まっている。何となれば、飛んでいる矢も各瞬間には一定の位置を占めている。一定の位置を占めているものはその瞬間、止まっている。ところが、矢の始点から終点までの時間はその間の瞬間から合成される。したがって飛んでいる矢は止まっている。

などの運動に関するゼノンの四つの議論。

(中央公論社：中村秀吉「時間のパラドックス」164ページより)

直すことによって生物学に何か新しい展望が見えてきたらしめたものである。

「かたち」と「要素」

「かたち」あるいは「構造」という言葉から、それを作っている部品などを直感的に思い浮かべる。機械なら歯車やバネだろうし、コンピュータならハードディスクやメモリなどだろうか。この様に大前提として「かたち」は種々の要素から成立することは疑いのない事実であろう。だから、かたちを考える時に、その構成要素とどのような関係にあるのかがまず問題となる。

「かたち」と聞くと輪郭の決まった固いものを瞬時に思い浮かべる人は多い。しかし、私たちは日常もう少し広い意味で「かたち」という言葉を使っている。たとえば、「この国のかたち」という表現を最近しばしば耳にするが、日本列島の「形」を意味しているのではないことは自明であろう。この「この国のかたち」という言葉を称して「構造的な概念」と言われるのは暗示的である。野球を見てみると、「ノーアウト満塁バッターは4番」の時に解説者は「いいかたちになりましたねえ」と言うことがあるが、この「かたち」を構成する要素は、「ノーアウト」「満塁」「4番バッター」である。ノーアウトだけでなく、毎回先頭打者の時に訪れる環境であるし、満塁であっても2アウトで9番打者なら得点できる望みは高くはない。「4番バッター」であっても「2アウト」で「ランナー無し」だったら決して「いいかたち」とは言われないうだろう。この場合の「かたち」とは、これら要素が揃った時に初めて生じる。

囲碁で「縦方向に二目、横に一目」の間隔で互いに離れている二つの石を称して「ケイマのかたち」と呼び、この様に碁石を並べるのは戦法の一つとして意味がある。味方や敵の石がどこにあるのか、これからどこをどの様に攻めるつもりなのか、などを考慮して、ケイマのかたちを選択するわけである。この「かたち」を形成する要素は二つの石であるが、それぞれの石が単独で「かたち」を作り上げているのではない。また、一つ一つの石が特別な意味を持つのではない。一つ一つの石を、最先端の技術を駆

使していくら詳細に解析しても「ケイマのかたち」は見えてこないし、別の石と交換してもケイマの「かたち」は無くならない。前の石があって初めて次の石はケイマの「かたち」を作ることができる。ただそれだけのことである。「二つの石の関係性」＝「ケイマのかたち」なのである。では、この関係性は二つの石のみによって成立しているのだろうか？この「縦に二つ、横に一つ」の位置関係を成り立たせるためには碁盤の目が不可欠である。もし、碁盤の目が存在しなければ、二つの石は一定距離を離して置かれた二つの点であり、その二点を結ぶ線は一本の直線にしかならないから、ケイマの位置関係を表現しない。この様に考えていけば、ケイマの「かたち」は、碁盤の上に黒石と白石を交互に打ち合い、できるだけ大きな陣地を取りあうという囲碁の体系（ルール）の中で成立していることになる。囲碁では、自分の石同士、あるいは相手の石も交えた関係性の中で、ケイマの他にも「ノゾキ」「シチョウ」「コスミ」などさまざまな「かたち」が存在する。「定石」ももちろん「かたち」に他ならない。一つ一つの石を交互に打ち合いながら、局面・局所で「かたち」を作って攻防を繰り返し、それが囲碁と呼ばれるゲームとなる。ルールだけを知っていても、定石を理解しなければ到底勝てないのは、囲碁というゲームにとって碁石そのものに意味が成立しないからである。碁石が局面で作る「かたち」に意味があり、たとえば「かたち」の成立を邪魔したり、別の「かたち」を作って攻め返したりすることが意味を持ち、その意味の集大成として囲碁というゲームが成り立っていると考えられる。

将棋では、桂馬という駒は前方に二つ・左右どちらかに一つ離れた位置に移動することができる。この離れ方は囲碁における「ケイマのかたち」と相似にも映る（図2）。しかし、将棋では駒の移動の軌跡は残らない。桂馬が動いた跡に、動く前の場所には何も無い。その時点で桂馬の駒が占めている場所を唯一見て取れるにすぎない。囲碁のような二つの石の空間的配置はどの瞬間においても成立しない。将棋の駒は一見すると小さなアクセサリーが置物、あるいは民芸品の様に見える。穴を開けひもを通して携帯電話のストラップにしたら素敵かもしれ

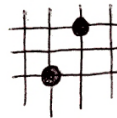
ない。結局のところ、将棋の駒を単体で取り出した時には本来の意味を失っている。桂馬が桂馬の意味を持つのは、「山崩し」や「回り将棋」ではなく、本来の将棋というゲームの中におかれた時である。この見地から将棋というゲームを考えた場合、「金」や「桂馬」が独立した価値を持ち、そこから将棋が発達したのではなく、将棋はそれ自体が完全な「かたち」であり、その中で一つ一つの駒が相互に依存した役割を付与されているにすぎないことが分かる。だから、将棋というゲーム（かたち）がなくなれば、金も桂馬ももはや意味を持ってなくなるので、

将棋の「桂馬」のかたち



前へ2、横へ1の位置に移動できる。

囲碁の「ケイマ」のかたち



将棋の桂馬の動きの様な位置関係に同種の石が並ぶ。向きは問われない。

●「ケイマのかたち」の解析をしてみよう



碁石だけをじっくり観察しても「ケイマのかたち」はみえません。



碁盤だけを観察しても「ケイマのかたち」はみえません。



碁石の位置関係だけを観察しても「ケイマのかたち」はみえません。

碁石と碁盤と碁石の位置関係の三つがそろわないと、「ケイマのかたち」は成立しません。「かたち」とは、それぞれの要素がそろった時にはじめて成立します。

図2. ケイマのかたち

アクセサリーにもなりうる。

囲碁のケイマとは、二つの石と碁盤の目との関係性においてその意味(かたち)が生じる。二つの石がケイマの関係になった時に初めて「ケイマ」の意味が突然現われる。だから、囲碁の体系におかれても、ケイマというかたちに並ばなければ意味を成さないのに対して、将棋の体系では、桂馬の駒としての意味が必然として成立しているのである。この意味の違いはそのまま将棋と囲碁の性格の違いに帰結するのだろう。

ゲシュタルトとは？

ここで議論している「かたち」を日本語で説明するのはかなり難しいのだが、これを的確に表現する見事な概念が存在する。「ゲシュタルト」である。あまりに便利であるがゆえなのか、あるいは他に日本語で表現できないからなのかかわからないが、「ゲシュタルト」はこのカタカナ表記のまま日本語の文脈でも用いることができる。辞書で引くと、「形態・姿などの意。部分の総和としてとらえられない合体構造に備わっている特有の全体的構造をいう。一つの図形やメロディーの様に、個々の要素の総和以上のまとまった意味と構造をもち変化・変換を通じて維持される姿形」などと説明されている。やはりわかりにくい。「ゲシュタルト心理学」は辞書によると「形態心理学。精神活動を心的要素の結合として説明する立場に対し、全体としての特徴、つまりゲシュタルトを直接的に認識するという事実を強調す

る心理学」となっているが、ここでもゲシュタルトの説明に苦労している。その意味を正確に捉えることに関していえば、「かたち」を説明するのと本質的には何も変わらないのである。ゲシュタルトの意味が分かれば、ここで議論する「かたち」の説明はもはや不要である。この辞書の説明で注意すべきなのは、「個々の要素の総和以上の意味」というところ。部品をすべて足し算するよりもさらに高次の、部品単体からはまったく予測できないような意味が存在することを「ゲシュタルト」という言葉で表現しているのである。一つ一つの要素に意味はなく、要素同士が作り上げる関係性のネットワークこそが「ゲシュタルト」であり、だから同じ要素からなる「ゲシュタルト」であっても、要素間の関係性が異なればまったく異なる「ゲシュタルト」となることを示している。

なお、関係性が確立してゲシュタルトが構築されれば、その後には多少の変化があっても寛容される点は面白い。関係性が閉じて一つのゲシュタルトとしての意味が与えられたら、その意味が一人歩きをするのであろうか。たとえば、乱雑な汚い文字やクセ字で、その文字単独では判別できなくても、文字の並びという「ゲシュタルト」によって全体を認識することができるのである。要素間の関係性が成立すると言うことは、関係性のネットワークとして閉じていることを意味する。閉じていなければ構成要素以外の要素の侵入を許すことにもなり、ゲシュタルトとして確立できないからである。関係性が閉じ

●ゲシュタルト崩壊

文字などがまとまりを失いその形状に違和感を覚える現象、ある全体パターンを全体的なまとまりとして把握できなくなること。

ゲシュタルト (gestalt) …ドイツ語で全体性・統一性を意味する

私が「ゲシュタルト崩壊」する漢字ベスト5

1位 麻 2位 若 3位 卵 4位 州 5位 狭

簡単に「ゲシュタルト崩壊」させる方法

- ①ひたすらじっと見る。
- ②ひたすら書く。

図3. ゲシュタルト崩壊

ていることはゲシュタルト自身が周囲から切り出されていることを意味する。周囲から切り出されていなければ「かたち」として認識されないのではこれはきわめて当然である。

。ということは、関係性のネットワークとして閉じた「かたち」は別の「かたち」の要素になりうるのである。コンピュータはメモリやハードディスクなどの要素からなるが、メモリやハードディスクなどもさまざまな電子部品によって確立する「かたち」であることは言うまでもない。一部の例外を除いて、要素とはそれ自体が「かたち」なのである。これは意味の議論としてあらためて考察する。

同じ文字を書き続けていると、あるいは一つの文字を見つめ続けると、その文字が違った記号に見える。この現象を「ゲシュタルト崩壊」と呼ぶ(図3)。ゲシュタルトとは構成要素の総和以上の意味の持つものであると説明したが、これを言い換えると、構成要素が織りなす関係性によって、個々の要素からは計りしれない「新しい意味」が生まれたとできる。だから、ゲシュタルト崩壊とは、その文字の「かたち」を見つめ続けることによって、その文字を構成する個々の要素を認識する様になり、したがってその文字が全体として持つ「固有の意味」が消失してしまった状態を指すと説明される。たとえば、「山」という文字をずっと見ていると、縦線3本に横線1本の意味のない線の集合に思えてくるような感覚である。この説明はこれで構わない。

しかし、少なくとも文字のゲシュタルト崩壊を考える場合に違う捉え方もできるのではないかと思う。たとえば「山」という漢字は、文章中に置かれた場合、他の文字との比較によって意味をなす。「山の家」や「山脈」のような文字体系に置かれた時に「山」の意味を持つのである。この場合は「山の家」

「ゲシュタルト崩壊」しやすい字



「洋服のタケをなおよす」の「タケ」の字を考えに考えた末に、「文」と書いてしまう。しかし、「だいじょうぶ」を漢字で書く時は、すんなり「大丈夫」と書ける。「大丈夫」という三つの文字を「かたち」として認識してるのじゃないか。

図4. 仮名と漢字のゲシュタルト

の構成要素として「山」は認識される。文字が単独で書かれている場合であっても、一見して「山」と感じるのは無意識下で何らかの文章体系を想定しているからである。だから何も意識せずばっと見た時には「山」であるが、漢字そのものをずっと見つめ続けると、架空に想定している文章体系は消え、その文字の存在のみが出現する。これは「山」を要素ではなく「かたち」として認識しようとするのである。構成要素の総和以上の意味を持つものが「ゲシュタルト」なので、構成要素に分解した途端に「意味」は霧散する。結局のところ「かたち」とは、それ自体を解析の対象とした途端にゲシュタルト崩壊を起こし、その「かたち」の意味は、上位の「かたち」における要素となった時にのみ相対的に理解されると言える。

仮名と漢字のゲシュタルト

表音文字としての仮名も表意文字としての漢字も、それぞれを図形として考えると両者共にゲシュタルト崩壊を引き起こすことは間違いない(図4)。しかし、そこに意味の概念を取り入れると少し事情は変わる。

仮名一文字は、脳が切り出してきた音の表記である(図5)。特定の音の切り出しには論理的理由はなく、また、これは各人が異なる認識を持っている可能性すらある感覚的なものである。だから、仮名を単独で取り出した時、そこに定義できる意味は存在しない。この様に「意味としての仮名」はそもそも「かたち」ではないのでゲシュタルト崩壊を引き起こせない。仮名は、構成要素として上位の「か

ア 阿	あ 安
イ 伊	い 以
ウ 宇	う 宇
エ 江	え 衣
オ 於	お 於



中国から伝わった漢字の音（おん）を使って書き表された文字を「万葉仮名」といいます。

現在の平仮名は、万葉仮名をくずして書くところから生まれた文字です。また、片仮名は、1文字のうちのどこかの部分を崩して表した文字です。

平仮名も片仮名も、漢字のかたちや音がベースになって成り立っています。

図 5. 仮名一文字

たち」を構築できる。ただそれだけである。それに比べて漢字は単独で取り出されても、記号としての要素があるのでそれ自体が意味を持つ。すなわち「定義できる」のである。その証拠に漢和辞典ですべての漢字が定義されている。漢字を一字だけで取り出しても、その漢字が内包する意味は、その漢字の成り立ちなどによって存在し続ける。この点かひらがなやカタカナ、あるいはアルファベットなどの表音文字との大きな相違点である。たとえば「形」という漢字は、「井（四角い型）+彡（模様）の会意兼形声」で、いろいろな模様をなす枠取りや型のことと言われる。すなわち、形という漢字の「かたち」には意味と音が備わっているわけである。もちろんある漢字は、特定の文脈や熟語になった途端に、単体の時とは異なる意味を持つ場合があるし、その場合には、その漢字単独で切り出してみるとそこには既に上位構造で持っていた意味が消失していることはある（「矛盾」を矛と盾に分解したら意味は消失する）。しかしながら、一般的には漢字はそれ自体が記号としての性格を多分に持ち合わせており、したがって漢字一文字を見つめることによって崩壊するゲシュタルトとはその漢字の「図形としてのかたち」のみである。もちろん図形としての「かたち」が崩壊すれば、その時点で記号として機能できなくなるために「意味としてのかたち」も消失するだろうが、それはあくまでも二次的な現象である。蛇足を承知でもう一つだけ付け加えると、その漢字の意味とその漢字自体には合理的な関係性はまったく存在しないのである。極論すれば山という漢字の意味を「川」という漢字（記号）で表現したってまった

く問題のないことなのである。漢字や仮名（図形）のゲシュタルトと、その意味のゲシュタルトは明確に分けて考えられるべきものなのである。

漢字を理解する時とひらがなを理解する時では脳の中で使われる場所が異なるようだ。これは失読症の研究から明らかになった。失読症とは、会話などにまったく問題がないにもかかわらず、文字で書かれた意味をまったく理解できない症例のことで、脳梗塞などにより特定の領域のはたらきが無くなること起こる。したがって当然の事ながら、健常者が読書をしている時には脳のこの領域が活発に活動している。失読症の研究は、実は欧米を中心に盛んに行なわれており、実際に失読症患者では脳のどの領域に欠損があるのか分かっているらしい。新たにシンガポールの研究者が同じ研究をしたところ、今までいわれていたのとはまったく異なる領域が読書に必須であるとの結論に至った。この結果の違いは言語の違いに起因する。アルファベットによる表音文字により表現される文章と、漢字のような表意文字により表現される文章の違いである。この様に、我々が漢字を読む場合には、図形としての漢字を読むのではなく、意味を包含する記号としての漢字を読んでいるのだ。

「差異」について

「かたち」が要素の関係性であるとしたら、要素とはいったいどう考えればいいのか？この点は重要なのであるが、この議論の前段として差異とは何かについて考察しておきたい。

「色即是空（仏教思想におけるかたち）」

260文字（「一切」の二文字が入って262文字となることもある）からなる般若心経は、数多く存在するお経の中でも最も簡潔であり、首尾一貫したものであると言われる。仏教の根本思想を一言で言うと「空」の一字に帰すると言われるが、般若心経ではそれを「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」と説いている。

「色」とは、具体的な物事・感情など物質的存在である。それが「空」であるとはどういう事なのか。この世には山も川もある。周囲を見渡すと机や本もある。喜び怒る感情も当然の事ながら誰にでもある。それらすべての存在自体が「空」だと言うのである。心経は説く。「すべての存在は空に他ならない」と。そして「空、それ自体が物質的存在なのだ」と。しかし、私たちは、実は実体のないものを実体であると見ている。それらが不変なのだと言っているのである。

私は、「かたち」の議論を繰り返している。その中で、すべての事象はア・プリオリには成立できないとした。私たちが認識しているすべては、私たちの論理体系によって切り取られてきたものであると考えてきた。あるものを切り取る時には、別のものとの違いを決めなければ切り取れない。

いきなり変な話で恐縮だが、「人が誰もいないところで巨木が倒れた時、そこに音は存在するのか？」という命題がある。音は、あくまでも鼓膜などの感覚器官を通して脳が認識する情報である。したがって、そこに人間がいなければ、木が倒れることに起因する空気の波は起きるであろうが、それが音として成立するかといえば、おそらく成立しない。我々が音として認識している特定波長の振動を、他の生物が我々同様に「音」として認識しているのか、それは誰にも分からない。我々が認識できない周波数の振動を認識できる動物がいる。だから便宜的に、馬は我々が聞こえない高周波の音も聞こえると表現してしまう。しかし、馬がその振動を音として認識しているのかどうか？これはわからない。コウモリのレーダーも、コウモリがそれを音として感じている

だから、その「あるもの」が、当たり前のように存在することはできない。それ以外のものがなければ、そのもの自体も消滅する。だから、あるものを取り出して考えようとすると、そこにあったはずの意味は消失するのである。そのものが置かれている体系（「かたち」）の中であって初めて意味を持つのである。極限の空腹状態に置かれた人が「食べ物がそこにある」と錯覚して手を伸ばすが、その瞬間にそのものが消え失せると物語などでしばしば登場する話があるが、まさにそういうことが起こる。「山」という漢字の実体を取り出そうとした瞬間に、縦棒3本と横棒1本の奇妙な記号へと姿を変える。すなわちゲシュタルト崩壊を起こす。私たちが認識しているすべての存在や、私たちが認識しているそのことは、実はそれ自体がア・プリオリに存在しているのではないということである。しかし、その「それ自体では何もないもの」が周囲から切り出され、それらが関係性を形作って集まった時に一つの実体が浮かび上がってくる。これがすなわち「色即是空」であり「空即是色」なのではないだろうか。

私ごときに、この仏教の根本思想が理解できるわけではない。しかし、この様に捉えてみてもよいのかな？と最近少し思っている。

るのだろうか？これも分からない。我々の脳が赤色しか認識できないとしたら、他の色は我々にとって「存在しない」と同義である。ということは、赤しか存在しない場合には「赤以外の色」の概念が成立しえないだけでなく、「赤色」の概念すら成立しえない。成立するのはモノクロ映画と同じ、明るいか暗いかだけであろう。結局は他の色が存在するから赤色も存在できるのである。

同様に、世界が一つの村だったとしたら、そこに村の概念は存在しえない。隣村・隣町との境界があつてこそ、自分たちの村が成立する。世界が一つの村なら、それは村ではなく地球と同じ概念になるが、この「地球」という概念に関しても、地球が太陽系の惑星の一つであると認識されて初めて「地球」となったわけで、それ以前は、地球（何もの球という

中国語では～

中国語の場合、共通語（普通話）は、
高低アクセントが四種類あり「四声（Sisheng）」といいます。

たとえば、「マー」の発音。

第一声は、お母さんを意味する「マー」。高い音で一定の高さを保ちます。

第二声は、麻を意味する「マー」。真ん中から一気に高く上げます。

第三声は、馬を意味する「マー」。低く抑えた音で、そっと力を抜くと自然に語尾が上がります。

第四声は、動詞の「叱る」を意味する「マー」。高いところから一気に下がる音です。

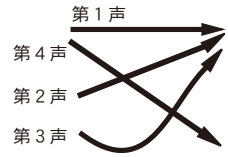


図 6. 中国語の発音

意味ではなく)は「大地」としか表現されなかった。では、この「大地」はア・プリオリ^{※3}に存在するかと言えば、それは間違いなく違う。大地とは、空や海との対比としてのみ存在しうる概念であり、空も水も何も無い、大地のみの世界において「大地」の概念は絶対に成立しない。同様に全員が同じ顔であった時には美人・不美人の概念は成立しえないし、頭がいい人も、頭のはたらきを測る試験のような制度で優劣が具現化して初めて、周囲との比較によって存在する。ある高校で前代未聞の天才であっても、東大に入学したらビリから数える方が早い場合だってありうる。この場合、その学生は賢いのか馬鹿なのか？その基準はあくまでも相対的にしか決まらないのである。結局は、ある実体が前提としてそもそも存在するということではなく、何をとても必ずそれ以外との違いによってのみ規定されるということなのだ。何かであるということは、それ以外のものではないということに等しい。生きものの頭部をあえて規定するなら「胴体とは違うところ」と言える。屁理屈に感じられるかもしれないが、実は頭部ができあがる仕組みにも如実にこれが反映されているのである。すなわち、頭部になる組織では胴体になるために必要な遺伝子がすべて抑制され、逆に胴体になる組織では頭部になる遺伝子がすべて抑制される

※ 3：ア・プリオリ

「認識論において用いられる難解な言葉。すべての人間に生得的、したがって本性的であること。すべての経験に、時間的に先立つというよりも、論理的に先立つこと。「先験的」や「先天的」などと訳されることもあるが、どちらの訳もこの語の意を尽していないとされ、カタカナで書かれることが多い。

ことによって、それぞれの同一性を担保しているのである。哲学の認識論が遺伝子の世界にも通用したとすることであろうか。

差異の意味

日本人はLとRの発音ができないとよく言われる。逆に英語を母国語とする人たちは日本語のラ行の発音ができない。なのに、なぜ日本人がLとRの発音ができないことだけがしばしば問題になるのであろうか？日本人が自虐的だから・・・欧米人が傲慢だから・・・なのではない。現実問題として、アメリカ人が日本語を話す場合に、ラ行の音をLの発音をしようかRの発音をしようか、問題なく日本語として通じるのに対して、英語のlightとrightを同じ発音をしたら通じないからなのである。要するに、英語ではRからLを厳密に識別しているのに対し、日本語ではラ行の周辺にある「似たような」音をかかなりの範囲でラ行として、その他の音から識別している。しかし、この書き方はアメリカ人には奇異に感じられるであろう。なぜなら、アメリカ人にとってLとRはまったく異質の音であり、「似ている」とは絶対に感じていないからである。Lの範囲を少しでもはずれたら、それは決してLとは認識されないのである。すなわち音の集合の中から切り取ってくる範囲が日本語と英語では明確に異なっているわけである。ラ行の範囲を決める、すなわちこの範囲をはずれたらいかに発音が似ていようかそれをラ行とは認めないと決める。英語では別にLとRの範囲が決められている。その範囲が、たまたま日本語のラ行の発音として認識されうる。ただそれだけであり、その間に何ら因果関係は成立しない。要

は、何かを決めることは、それ以外とは違うという差異を明確に規定することに他ならない。同様のことは、アクセントについても言える。日本語ではアクセントが意味を持つことはほとんどありえない。関東と関西ではアクセントが真逆の場合が多いし、その他の地域に行けばさらに関東とも関西とも異なるアクセントとなる。しかし、通じる。すなわち同じ言葉としての意味を成すのである。英語ではアクセントが異なれば絶対に通じない。まったく別の理解不能な言葉になってしまい、似ているとは決して思わないからである。中国語では、アクセントを変えることで違う意味を与えているようだ(図6)。アクセントという切り口で言葉を切り取り、その他の音との差異を認識し意味を与えているのだろう。

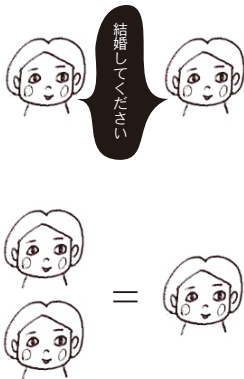
絶対的な世界があるとしても、我々にはそれを認識できない。その中のある部分だけを「切り出す」ことで我々は世界像を認識しているにすぎない。連続した光の波長の中の特定の範囲を恣意的に切り取って「赤色」と決めた、それだけである。絶対世界から恣意的な世界像を切り取り、そこに構築されたものだけが私たちの認識できる世界である。切り取る時に重要なものは、それ以外との差異のみで

あって、そのものの実体ではない。境界、すなわちそれ以外のものとの「差異」なしに、ア・プリオリに実体は存在しえない。二つのものにまったく差異が存在しなければ、それは一つのものとしか言い様がなく、そのどちらかを選べと言われたらブリダンの驢馬は餓死するのである(図7)。日本に住み続け、日本語を自由に操れる様になったアメリカ人が、日本語の「悔しい」という表現に出会い、それを使いこなせる様になって初めて、「悔しい」という感情が芽生えたという。言語無くしては思考も感情も存在しえない。なぜなら絶対世界から言語によって感情を切り出してくるからである。ある言葉が何を指し示し、また何を意味するのかは、その言語体系によってすべて規定される。「悔しいという感情」がア・プリオリに存在するからそう感じるのではない。強いて言えば、言語によって切り出された結果として「悔しい」という感情が脳の中に発見されたのである。

この様に、「かたち」を構成する要素はいかなる場合においてもア・プリオリに存在するモノではなく、その他のものとの差異によって切り取られてきたからこそそこに存在しうるのである。

ブリダンの驢馬

非常に飢えた驢馬が、目の前から等距離の地点に同じ食料を置かれる。すると、驢馬はどちらを先に口にするのか迷い、よだれを垂らしながら遂には餓死するという寓話。しかし、現実にはそうならない。なぜなら全く差異のない二つのものは存在しえないからである。



たとえば、二人の女性に「どうか私と結婚してください」と言われたとします。あなたは、どちらかの女性を選びたいのですが、顔が同じ、身体が同じ、性格も同じ、名前も同じ、くしゃみの仕方も、寝相も、ラッキーカラーも、なにからなにまで同じなのです。
さて、どちらの女性を選びますか？
選べませんよね？差異がなければ、どちらか一人を選ぶことはできません。
「差異がない二人の女性」=「同じ女性」=「一人の女性」と認識されます。

図7. ブリダンの驢馬

言語と認識

私たち日本人は、世界が実在するもの（山・川・海・机・家・・・）から成っていると疑わない。しかし、それは日本語を通して世界を理解しているからにすぎず、それら一つ一つのもので、ア・プリオリにこの世界に存在しているのではない。だから、他の言語でこの世界を見たら、かなり異なって理解される。同様に、私たち日本人は日本語で物事を考えている。非常に根源的な感覚以外は、おそらく感情的な部分の多くも日本語の論理体系を通して感じているはずである。もちろん、言葉としていちいち頭に思い浮かべたりしないけれど、前述した「悔しい」みたいな感情も間違いなく日本語によって成立している。

同じ現象を見ても、異なる言語体系を持てばまったく異なる感じ方をする。まったく異なる意味を持つのである。絶対世界から言葉によって切り出されたものこそが「意味」である。「犬」という言葉は、さまざまな生きものが存在する中で、「犬」として認識できる生きものを切り出しているのである。ここで「切り出す」と言った。では、「犬」というものを認識して積極的に「切り取ってくる」のであろうか。実はそうではない。「犬」を切り出す時には「犬以外」を識別し、「犬」が示す範囲を切り取ることによって、「犬」という概念を作り上げるのである。なぜなら、「犬」という概念はそもそもア・プリオリに存在しえないからである。

「犬」という言葉を「かたち」として見ることができるだろうか。「犬」の概念は人によってさまざまかもしれない。少なくとも学問上の明確な規定を伴った定義でなければ、人それぞれがイメージする「犬」は微妙に異なるはずである。動物界の中から「犬」を切り出して意味づけしているわけである。人が生まれ、言葉を獲得した時には、四つ足動物を総称して「ワンワン」と呼んでしまうこともあるかもしれない。その都度、親や周囲の人が「あれはニャンニャンよ」などと教える。これを繰り返すうちに、「ワンワン」以外のものとの差異を経験的に見つけ出し、それらを排除してその人にとっての「ワ

ンワン」の概念が確立する。たいていの場合は、この教育段階で共通の概念を獲得するが、それをあらためて厳密に確認する操作を普通は行なわない。だから、厳密には「犬」が指し示す「意味」がすべて同じであるとは言えない。あくまでも日常的に用いられる日本語体系の中で検討され、齟齬をきたさないというレベルにおいてのみ、共通の「意味」が維持されているにすぎない。この様に人によっても微妙に異なる可能性があるのだから、言語が異なれば指し示す範囲が異なる可能性は十分にある。だから、たとえ日本語の「犬」が英語の「dog」に相当するにしても、「犬 = dog」ではなく、まして「犬」という実体がア・プリオリに存在してそれに日本語では「犬」が、英語では「dog」が与えられたのではない。あくまでも両者が切り出してきたものが等しかったという事実以上のものはない。

面白いのは、ある言葉を形作る要素もまた言葉であり、その要素自体の意味は、さらにそれを形作る要素同士の関係性のネットワークによって決まる。一つ一つの言葉の切り取り方は、たとえ同一言語を話している人であっても微妙な振幅が存在するし、一つの言葉の切り取り方が微妙に異なるだけで、その言葉によって説明される言葉の「かたち」（意味）も微妙に影響を受けることとなるので、日本語を話す二人の人間が厳密に同じ理解をしているかはなほだ心許ない。「犬」などのような言葉は、まだ振幅は小さいだろうが、これが思想信念などの「概念」を表現する言葉になると、二人の人が厳密に同じ「かたち」を認識することはありえないのではないかとささを感じる。これら、切り口の振幅が人によって異なっても、その変異は言語の体系に戻された時の淘汰圧を受ける。すなわち、その言語体系の中におかれて成立しえない変異は意味を成さなくなり、したがって修正されるか抹消される。言葉の意味を誤解したまま使用すると恥をかき、「正しい（通じる）」意味を学習する。この様にして各人による「振幅」は言語体系によるフィードバック制御を受け、もともとの「かたち」から大きく逸脱しない様に維持される。そうでなければ言語体系は崩壊する。

だから異なる言語間での真の理解は絶望的にすら思える。その言語体系において「ある哲学的・思想的概念」を想定する。この概念は、何らかの環境要因を背景にして絶対世界から切り出され、その言語体系の淘汰圧を受けながら生存してきた。この概念を日本語に輸入する場合、果たして厳密に同じ概念として理解できるのだろうか？概念であるだけに、明確な対象物を指し示すことはない。論理によって構築され、それまで存在していた要素間に新しい関係性が成立した「かたち」である。論理を展開する場合には、用いられる言語体系に完全に依存するはずである。その言葉が成立するきっかけとなった論理の中で用いられる言葉にも、もちろん意味が存在する。その意味もまた、その言語体系によって成立し、淘汰圧を受けながら生存してきた「かたち」である。同じ要素を用意しても、異なる関係性を成立させれば異なる「かたち」が生まれ、異なる意味が生じる様に、その概念を形作る要素自体には意味はなく、その要素がどの様に互いに関係し合っているのか？その要素もまた、どのような言葉の関係性によって意味づけられているのか？が決定的に重要なのである。そして、この関係性を規定する大きな要因として、その言語体系があるのは自明のことであろう。

一つ一つの言葉が持つニュアンスは微妙に異なる。言語体系の違いもあろうし、宗教観の違いもあろう。言語体系自体も宗教観によって大きな制約を受けるだろうし、宗教観も言語という論理体系に

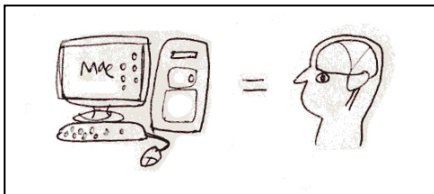


図8. 脳とコンピュータ 本文では、脳はコンピュータであると述べているが、これはあくまでも思考に関してのハードとソフトの議論から強いて表現しているだけである。脳には、コンピュータのハード以上の能力があるのは当然であり、特に何かを恣意的に切り出して認識する感覚はコンピュータにはできない。

よって制約を受けるはずである。だから、極端な場合、自分とは決定的に異なる宗教観を絶対真理であると信じる人と話してもまったく理解し合えないのは、用いている言葉一つ一つの「かたち」が異なるからである。同一言語であってもこのような齟齬は簡単に生じるので、異なる言語での議論はきわめて難しい場合も多い。日本語に訳せばかろうじてそれに近い意味合いの言葉にはできる。しかし、その言葉が成立している根本の意味が日本語体系には存在しないか、その「かたち」が日本語では成立しえないのであろう。だから「話せば分かる」は、多くの場合でなかなか難しい。同じ言語を話す人たちであっても、その人の基本となる思考体系がそれぞれ異なる。宗教観や哲学・倫理観などが違う時にも、基本的な思考方法が同じでその上に乗っている価値観が異なると普通は考えがちであるが、実際には、使用している言語の「かたち」が異なり、したがって思考体系も異なることとなり、論理体系も違ってくる。この思考体系が根本的に大きく異なれば、議論がまったくかみ合わなくなる。これを養老孟司氏は「バカの壁」と呼んだ。頭の善し悪しの問題とは本質的に違うのである。

近年、脳の研究が盛んである。しかし、脳自体の研究は、ハードとしての脳が持つ能力の研究に他ならない。コンピュータのパフォーマンスを解析しているようなもので、人間の思考は、その脳にインストールされた言語というシステムが担っていることを忘れてはならない(図8)。脳がわれわれの思考や行動を規定しているのは明らかなことであろうが、ハードとしての脳が基本的に行なうはたらきと、インストールされたソフトが担うはたらきは明確に区別されなければならない。極論すれば、人間の思考に関する研究は脳科学ではなく哲学の領分なのであろうとさえ思うのである。

「意味」について

大前提として、意味づけられるためにはそのものが規定され(存在し)ていなければならないことは論を待たない。ということは周囲との何らかの差異によって切り出されていなければならないわけで、「かたち」を構成する個々の要素、あるいは「か

たち]それ自体が意味づけされる対象である。また、意味には二種類の捉え方をする必要があるのである。それは、「かたち」の中で要素が持つ意味と、「かたち」自体が持つ意味である。前者は「意義」後者は「定義」とも言い換えられる。

小学一年生の夏、何を思ったのか帰宅した父親がいきなり「主税、日曜日に奈良の大仏さんに連れて行ってやる」と言った。「奈良の大仏」と言われても、まったくびんと来ないが、どこかに連れて行ってくれるというのだから喜んだ。それから毎日、私の顔を見るたびに父親は「大仏さんは大きいぞ」と繰り返した。私の中では何も具体的なイメージは湧かなかったのだが、ただ「大きい」という感覚だけが心の底に漠然と染みついた。日曜日 came。大仏殿の入り口に立った私が最初に感じたのは、「確かに大きい・・・だけど・・・」という、なんとも不思議な感覚だった。誰でも経験しているアレである。どんなに美味しい料理でも、食べる前に「美味しい」を強調され続けると、実際に食べた時に「美味しい」んだけど、言うほど美味しくないなあと感じるあの感覚である。この日から私の中でこの感覚のことを「奈良の大仏」と表現する様になった。経緯を知らなければ意味不明の（あるいはまったく別の意味を持つ）会話になるが、この「意味」を理解していれば、なんとも使いやすい、ある条件下では正鵠を射た表現となる。「あまりに強調しすぎると奈良の大仏になるかもしれないけど、でもあの店はすごく美味しいよ」って言葉で微妙なニュアンスまでも含めて言いたいことを明確に表現できるのである。「奈良の大仏」という普通の言葉に新しい意味が付加さ



※ 4：ウルトラマンやジャイアントロボ・マグマ大使など

ウルトラマンの身長は 40 m（ちなみにタロウは 53 m）。
ジャイアントロボは 30 m（50 m 説もある）。
マグマ大使は 7 m。
奈良の大仏の座高は 15 m。

マグマ大使は、わりと小さいね。

れたのである。

「奈良の大仏」は、奈良市東大寺大仏殿の中に座っている毘盧遮那仏以外の意味は一般にはない。しかし、私にとっては、子供時代の体験によってまったく異なる意味になった。さて、この場合の意味についてである。まず、子供時代の体験、すなわち父親の言葉やその後の対応、ウルトラマンやジャイアントロボ・マグマ大使^{※4}などをテレビで見ている環境や経験、その他にも精神的・物理的な諸々の状況がすべて一つの関係性となって私の脳の中に成立した時に、「奈良の大仏」は奈良の大仏とはまったく異なる「意味」として切り出されたのである。これが慣用句として私が勝手に使っている「奈良の大仏」である。「奈良の大仏」が慣用句としての意味を持つためには、その言葉が要素として使用される上位の文脈が必要である。その言葉が使われる文脈無しに「奈良の大仏」は意味を持つことはできない。ために、前後に何の脈絡もない時に突然「奈良の大仏！！」と叫んでみたとしたらどうだろうか？この言葉には何の意味も成立しない。この様に考えると、定義（この場合は「奈良の大仏」という言葉を、一般の奈良の大仏と区別し特徴づけること）と、意義（上位の文脈、すなわち「かたち」、の中での意味）は異なることは明確である。

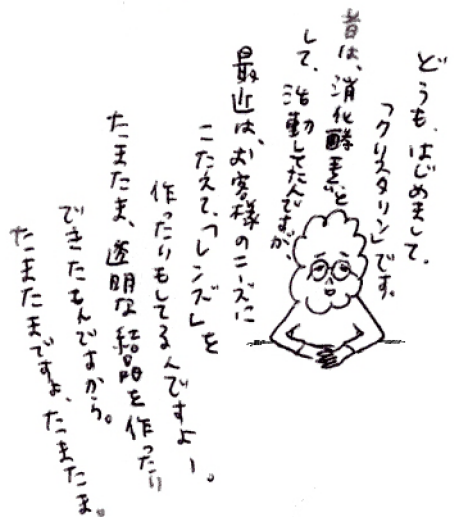
「かたち」が要素の関係性によって閉じた時に、その「かたち」を新たな記号で表記することができる（たとえば、さまざまな要素の関係性から生じた感覚を「奈良の大仏」という記号で表わしている）。そして、その記号の定義とは、その「かたち」を確立している要素間の関係性に相当する。言い換えると、閉じた「かたち」が他の「かたち」とどの様に異なるかを指し示すことこそが定義である。

これに対して、要素の存在意義を考える場合には、上位構造の中での役割を考える他になく、これはその要素が構築する関係性に完全に依存する。意義とは、他の要素と共に構築する関係性（すなわち「かたち」）の成立・維持過程でその要素がどの様に働いているのか、もっと端的に言えば、その「かたち」における重要性・存在意義（「かたち」への貢献度という方が的確かもしれない）のような概念と等しくなる。したがって、ある要素が異なる体系におかれた場合、その体系においてその要素が存在しうるかどうかとは、その体系においての存在意義が成立するかどうかにかかっているのであって、前の体系における意義は一切関係がない。その体系において淘汰圧を受けるのは「意義」であって、それ以外のものではないということであろう。目のレンズを作るクリスタリンと呼ばれる蛋白質は、もともとは消化酵素であった。しかし、消化酵素という「前の体系で持っていた意味」は、レンズとなる場合には一切関係はない。クリスタリンは「透明な結晶を作ることができる」という特徴によって、他の消化酵素との差異（すなわち意味）を持つことができたのである。逆に言えば、結晶化して透明になる性質の蛋白質であれば、クリスタリンでなくてもレンズになりうるだろうし、ただそれだけのことなのである。クリスタリンが、あたかもレンズの発生に意味を持っている様な考え方は本末転倒であり、レンズには、結果としてたまたま偶然にクリスタリンが使われ始めたにすぎないのである。クリスタリンは、消化という体系（かたち）にあっては消化酵素という存在意義を持ち、レンズ形成という体系に置かれた時に初めて光を屈折させるという意味を持つこととなっただけである。

この二つの「意味」を示す好例はミステリ小説にある。たとえば、ひと組の夫婦と一人の男性の三角関係を描くとする。次第にその男性の好意を相手も受け入れ始める・・・という流れの中で、二人の男性が話し合っている。「一人の女に二人の男だ、どうあがいても落ち着くところなんてあるものか」、「俺たちのことよりも、何よりも彼女の気持ちをお大切にすべきではないのか？彼女にはなんの罪も

ないのだから」。妻を奪い取ろうとする男と夫の間の苦悩という明確な意味をこれらセリフは持って小説の終盤まで展開する。しかし、最後の最後に、実は、男は夫の方に好意を持ち、夫もそれに応えようとしていた事実が明らかになると、先ほどのセリフはまったく違った意味を持つ様になる。優れたミステリ小説はこの技法を有効に利用している場合が多い。連城三紀彦氏の傑作短編集「戻り川心中」に漂う幻想にも似た巧みな文体は、意味の相対性や不確定性をまざまざと見せつける。それ自体が明確な意味を持つと思われる文章であっても、その文章自体の意味を考える場合には、それが語られる文脈や周囲の状況を考えることなしには、実は何も意味しない事になるのだ。上位の構造の中での存在意義こそが意味であり、他のものとの関係性においてのみ意味は決まるということである。

「人間は、記号しか認識できない。記号とは、それ自身の中に意味を有するのではなく、それを取り巻く他の記号たちとの《関係性のネットワーク》の中でしか意味を持ちえない。したがって記号とは実体ではなく相対的な存在である」とスイスの言語学者ソシュール^{※5}は主張した。この表現は、かたち



と要素の枠組みに照らして意味という概念を明確に示している。また、アメリカの言語学者サピア^{*6}は、「言語はあらかじめ存在する現実や思考を反映するのではなく、言語によって現実・思考の分節化・カテゴリー化が異なる」との認識を示している。すなわち言語体系こそが、絶対世界を認識する唯一の方法論であり、それは言語体系が恣意的に切り取ったかたちでしか認識できないということの意味しているのである。

これらの考察は、「意味」を考える上で非常に重要である。ソシュールは、「発音が似ていたり、あるいは語源的につながりがあったとしても、言語形式上の同一性はまったくない」と考える。ある「かたち」が異なる「かたち」へと変化する時に特定の構成要素が生き残ったとしても、その理由は「体系

※5: フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) (1857-1913)

スイスの言語学者。言語哲学者。記号論に大きな影響をあたえた。生前ほとんど出版物はなかったが、ソシュールが講義した3回の授業の内容を、学生達がノートを寄せ集めてまとめた本「一般言語学講義」(1916年)が世に出る。

※6: エドワード・サピア (Edward Sapir) (1884-1939)

アメリカの人類学者、言語学者。アメリカの構造言語学を主導し、「サピア・ウォーフの仮説」と呼ばれる様になった説を提唱したことで知られる。(ウォーフはサピアの弟子)「サピア・ウォーフの仮説」

「現実世界はかなりの程度社会の言語習慣の上に無意識的につくられるのであり、それぞれの社会は独自の言語を持つから、社会が異なれば世界も異なる。ある言語にあるものを指す言葉がなければ、それはその言語の話し手の思考や世界観の一部にはならず、ある意味では、知覚されない。」という説。

すなわち、言語カテゴリーが世界の知覚を形作るという説である。また、人が話す言葉と、人の物事の理解のしかたやふるまい方には親密な関係があるとする、言語学分野における考え方である。ちなみにサピアの考えを弟子のウォーフが発展させたものがこの「仮説」であり、サピアが考えていなかったところまでウォーフが論を発展させず、そのところが批判の対象になっていると一般には認識されている。だから、この「仮説」に対する多くの批判にはサピアは無関係である。

変化の後にも、その要素が入り込める「場所」が存在したからである」とするのである。言い換えれば、新しい「かたち」の中で新しい関係性を構築できたにすぎないということである。新しい体系で新しい意義(役割)を持てる「要素」だけが生き残るのである。

定義できるものと定義できないもの(切り取る方法)

要素になりうるものは、大前提として絶対社会から何らかの境界によって切り取られるものでなければならぬ。切り取られなければ要素として認識できないからである。では、どの様に切り出すのか?ここで要素の概念を二つに分類せざるをえない様に感じる。一つは恣意的に切り出してこられたものであり、これは定義ができない。もう一つは下位の要素が関係性を作って閉じ、それが新しい要素になったものであり、これは当然だが定義できる。

恣意的に切り出された要素について見てみる。赤色は、ある範囲の光の波長を赤色として脳が切り出した結果であるが、その範囲に合理的な意味はない。おそらく境界領域ではひとによって赤色の概念は揺らいでいることだろう。光の波長変化は連続的であるために、波長が徐々に短くなれば認識される色も赤色から徐々に橙色へと変わる。だから、私が赤いと感じる色をあなたは橙色と感じているかもしれないが、明確な赤色を見た時にそれを橙色と認識することはない。この色を識別する感覚は絶対に定義できない。もっと極端に言えば、私が赤色と認識している色をあなたは青く認識しているかもしれない。しかし、青く認識している色を見て「赤色」と生まれてこの方ずっと教えられ続けたから、あなたはそれを「赤い」と表現する。リンゴを見て私は赤色だと感じるから「赤い」と言うが、あなたは青色に見えているのに、その色を赤色だと学習してきたので、やはりリンゴは「赤い」という。そんなことが起こっていないことを証明できない。だから、その実体が存在するのではない。連続する光の波長の中である範囲を感覚的に「赤色」と認識することは脳が恣意的に行なっているとしか言えない。

絶対世界があるとしても、そこには人間の論理で物事が存在してはいない。もし森羅万象すべての物事を正確無比に認識しようとするれば、情報の煩雑さに脳は破綻することだろう。だから重要な脳の働きの一つとして、さまざまな情報を「同じ」として括ることがある。リンゴも、大きいものから小さいものまでさまざまだし、形も色もすべて異なっているが、これらすべてを違うものとして認識し始めたら言語は成立しない。「リンゴ」といえば共通に通じるような感覚がなければ言語そもそも成り立たないのである。定義できないけれど感覚的に認識できることは脳の重要なはたらきだと考えられており、その「感覚」をクオリア^{*7}と呼ぶ。「赤色」の様に脳が恣意的に切り出している概念、何らかの脳の事情で、これ以上は要素として分解することのできない概念、よって定義することもできない、あらゆる「かたち」を考える上での最も根本的で最も単純な要素は、生物学的な脳の働きとしてのクオリアによって必然的に切り出されている。だから、クオリアを考慮に入れ始めると「かたち」の議論は収束つかない。クオリアはア・プリオリに存在するモノとして認識されるしかないのである。なぜなら、「かたち」の議論では最小要素はどうしてもア・プリオリに存在しなければならないこととなるが、いかなる要素もア・プリオリに存在しえないからには、要素を恣意的に規定する「何か」が必要となるわけである。その定義からもクオリアにより規定されるものは定義できない。したがってクオリアの存在自体はいかなる要素の関係性で規定されるモノではなく、ア・プリオリに存在すると言わざるをえない。クオリアによってのみ規定される最小の要素同士が関係性を確立し「かたち」が生じ、次にその「かたち」が要素になり、その他の要素同士と関係性を結

※ 7: クオリア

クオリアは、「赤い感じ」の様に、私たちの感覚に伴う鮮明な質感を指す。クオリアは、脳を含めての物質の物理的記述と、私達の心が持つさまざまな属性の間のギャップを象徴する概念。クオリアが脳の中のニューロンの活動からどの様に形成されてくるかということは、私たちの脳における情報処理を特徴づける「統合された並列性」を解く上で重要な鍵になっている。

(クオリア・マニフェスト公式ホームページより)

んで新たな「かたち」を形成する。そして、その「かたち」が新たな要素となり……。この様に「要素」と「かたち」の関係はクオリアに端を発した多重の階層性となっている。

我々の思考は脳によってなされる以上、ヒトの脳が作り出すクオリアにより思考が始まることは不思議ではない。ヒトの脳がクオリアを認識する能力を持たなかったなら、言語も思考も獲得しえなかったのは間違いないのである。ある感覚を脳が恣意的に切り出すまでは生物としての脳の働きに依存するが、その後それら切り出されたものがさまざまな関係性を作り上げて定義可能な要素を作り、それがまた上位の定義可能な要素を作るところは言語体系に依存する様に感じる。あるいは逆に、クオリアより上位の階層化した関係性こそが言語体系と言えるのかもかもしれない。

生物の分類について考えてみよう。生物を直接的に定義することはきわめて困難であり、原則的には他の生物とどの様に違っているのかによって分類が進む。すなわち分類における定義も差異と同義なのである。しかし、差異を徹底的に比較すると最終的には個体にまで行き着く。なぜなら双子であっても完全に同一ではないのだから。しかし、実際にはこの様に個体差に至るまでのどこかに、個体レベルまで分類することはないけれど、これ以上分類可能な単位が存在するのではないかと考え、それをタクソンと名付けた。分類学は英語でタクソノミー (taxonomy) というが、タクソンという概念を見いだす学問という意味合いである。実際、日本語で犬と呼ばれ、英語で dog と呼ばれて他の生きものから識別されている生きものは、互いに等しい。とすれば、言語が異なってもなお共通に認識される概念が存在すると考えても不思議ではない。ここで注目すべきは、タクソンという概念を考えているのは人間の脳である。言うまでもなくタクソンが実体として存在する保証はどこにもない。タクソンとは、定義不可能な概念であり、色などと同様に直感的に脳が切り出すクオリアにきわめて近い様に感じる。こう考えると、「タクソン」を追い求めることは脳のはたらき (すなわちクオリア) を追い求めてい

ることと同義にはならないだろうか？

「かたち」の考え方を押し進めるとその先に存在するのは絶対真理の否定であろう。絶対真理は存在するかもしれないが、我々が「真理」だと考えるものは人間がそう考えたモノにすぎないのである。だから、哲学の世界で最も重要視される「テキスト」に関しても、構造論では、論理（筋）さえ通っていただければ読む人によって解釈が違って問題ないとしてしまう。かたち・体系はその人の究極的な価値観（言語体系や宗教観・道徳観など）によって決められるし、要素自体すらもその人の自由意志によって勝手に切り出されてくるモノなのだから、いくら論理的に筋が通っていると言っても、それはその人の持つ論理体系に照らして筋が通っているにすぎず、その論理体系では真理であっても、それが絶対真理であるとは決して言えないというのである。

ユークリッド幾何学^{*8}の五つの公理も、その前提条件を変えることによって崩壊する（非ユークリッド空間では二つの平行線は交わることができる）。崩壊と言っても、ユークリッド幾何学が示す条件下では決して崩壊していない。論理体系自体を変化させることによって別の真理が出現したという意味である。これが示すことは、公理といえども永久不変の真理を示すモノではなく、ある前提条件下での一つの体系にすぎないことである。19世紀の終わり頃になると、ユークリッド幾何学ではどうしても説明の付かない現象が現われてきた。そこでアインシュタインが登場する。彼は、現象自体に空間

※ 8：ユークリッド幾何学

公理（学問上証明抜きで正しいとされる命題のこと）から出発すれば、幾何学の知識は、すべて証明（の連鎖）によって、あとづけることができる。

ユークリッドの「幾何学原本」に載っている公理は、次の五つである。

- ① どんな二点のあいだにも、一本の線がひける。
 - ② 線分を、すきなだけ延長できる。
 - ③ すきな点を中心に、すきな半径の円を描くことができる。
 - ④ 直角はどれも等しい。
 - ⑤ 直線外の一点を通して、その直線に平行な直線を、一本だけひくことができる。
- （橋爪大三郎「はじめての構造主義」より）

や時間がア・プリオリに備わっているという考えを捨ててしまった。観測結果は観測者によって異なるのであり、それを同じユークリッド空間に納めることは間違っているとしてしまったのである。すなわち、宇宙空間はねじれているとしてしまった。もう一つ、ミクロの世界でも同様の発見がなされた。量子力学である。原子とは陽子の周りを電子が回っているだけという、ある意味、ニュートン力学で簡単に解けそうな問題を研究するうちに、ニュートン力学では手も足も出ず、結果的に「不確定性原理」なるモノを提唱するに至ったのである。すなわち、電子が今どこにいるのかなんて確率的にしか表わせないというのだ。結局、ユークリッド空間の限りにおいてユークリッド幾何学はすべての現象を説明できるだけである。

直線がゆがんで見えるめがねをかけたら、まずは普通には歩けないし何かをつかんだりするのも一苦労だろう。かなり慣れなければ普通の文房具や大工道具だって使えない。左右を反対に映すめがねもある。これをかけたら、とても動けない。自分の目が「右」だと思う方向に身体を動かすと左に身体が動くのだから。しかし、これらはすべて慣れると不自由なく対応できる。右・左も直線・曲線も我々の目がその様に感じているだけの話であり、しかも、その認識をその他の感覚が日常の訓練によって補っているにすぎない。私たちが見ているものがア・プリオリに決まっているのではなく、もっと言えば私たちが同じものを見て、はたしてまったく同じ認識をしているのかなんて不確かなのである。

時間について

ここまでは、時間の概念をまったく考えずに「かたち」だけを議論してきた。ある意味で時間を止めて考えていた。ここで、時間について簡単に考察してみよう。

ポール・ワイスは、ひよこをすりつぶした時に消えるものの正体は何か考えた。すりつぶす前と後では決定的に違うけれど、物質として消失したものは何もないはずである（図9）。ひよこを構成するすべての要素はそのまま残っていなければならない

からである。では、ここで失ったものこそは「かたち」なのであるか？養老孟司氏は、「かたちと共にはたらきも失われている」とした。そして、だから「かたちとはたらきは同じものを違う側面から見ているにすぎない」のだとしている。すりつぶされたひよこにはかたちは存在しないが、そのかたちの中の要素一つ一つが持つ「意味」も存在しなくなっている。したがって、そこにはたらきが成立するわけもないということである。

はたらきには時間軸が必要であると議論の初めの方に書いたが、この書き方では「時間」という概念がア・プリオリに成立していることを前提にしている。しかし、果たしてそうなのだろうか？時間とは、ある瞬間のかたちを要素と見なし、別の瞬間のかたちも要素と見なした時の、これら要素同士の「関係性」だろうと考えている。すなわちある瞬間のかたちと違う瞬間のかたち、そのまた違う瞬間のかたち・・・同士の連続した関係性こそが時間概念を成立させているのだろうと言うことである。

すりつぶしたひよこを、その瞬間の状態を固定して見れば、「かたち」のみの消失となるが、少しでも微分的時間感覚を視点に入れば「はたらき」の消失も見えてくる。そして、これは逆説的なのだが、はたらきを考える時には時空間を股にかけるような「かたち」の関係性を考える他ないのであるとすることである。

同一時空間において何らかの「かたち」（複数の要素が織りなす関係）が存在すると想定しよう。「かたち」は、囲碁の対戦の瞬間でもなんでもいい。次の時空間に移った時に、そのかたちに何も変化がないとしたら、そのかたちだけを見た場合には、それらが同一時空間のかたちなのか、二つの異なる時空間で存在するかたちなのか判断できない。この様に、その認識対象にまったく変化がない場合にはたして時間の概念は存在するのだろうか？前にも議論した様に、時空間を超えた関係性を「かたち」として認識する場合に、それぞれの時空間に存在している個々のかたちが要素となる。さて、ここまでで要素として意味をなすためには「差異」がなければなら

ないことは見てきた。この場合には「なんの変化もない」わけであるから、もちろん「差異」はありえない。したがって、その時空間を超えたかたちの中で、それらは別々の要素として成立しえないし、したがってそれらの間には関係性は成り立たない。ということは、これら二つの要素は時空間を超えて存在しているとは考えられないのである。だから、単



図9. ボール・ワイズの思考実験

一の時空間しか特定できず、よってその「かたち」に関する限り時間の概念は成立しえない。時を測るには、ある時空間から別の時空間に移る連続した変化によるしかない。私たちは時の流れを知っている。だから、その現象に変化がなくても時が進んでいることを理解している。でもそれは、私たちが生きているからなのであって、生きていると言うことは、いつも変化を続けていることである。呼吸をし、エネルギー交換をし、一瞬たりとも止まっている状態はありえない。だから時を体感する。また、感じるという脳の働きも神経繊維の活性化という変化によらなければならない。私たちが、「時間はア・プリオリに存在する」と感じている時、私たちの身体の中も外も常に変化し続けているという事実を認識しなければならない。

平家物語にも書かれている様に、仏教では世のすべてのものは無常であると説く。人の気持ちも時と共に移ろいゆく。どんなものでも少しずつ朽ち果てていく。それが世の常なのだそうだ。「時」の存在を自明として考えればそうなるのかもしれない。仏教で「無常」を説く時には、時の流れは前提条件として存在するが、実は時の流れ自体が「変化」を必要条件として成立しているとするれば、「時が流れるから無常」なのではなく、「無常なのだから時が流れる」のだと気付く。目の前の机は短い時間では不変かもしれない。しかし、私たちは自分たちが時の流れを必然として感じているし、時が流れる以上、物事は無常であることを知っている。だから、「机もミクロのレベルで見たら刻一刻と変化している」「微細なほこりは絶えず机の上にとまり続けている」などと説く。私たちは年をとる。しわが増え、老いさらばえる。これは私たちが時を感じる以上は必然なのである。生命活動とは、一刻の休みもなく変化し続けることと言える。だからこそ、私たちは時の流れを知ることができるのである。

だから、「はたらき」と「時間」を考えるには、「《かたちの変化》のかたち」を捉えなくてはならないだろう。時空間をまたいだ「かたち」が時間を決めていると考える方が理に適っているようである。この様に時間も含めて、「かたち」とは自ずから相対

的であらざるをえないので、アインシュタインは相対性を考えたのだろうか？

時間のかたち

時間とは、『異なる瞬間に成立している「かたち」間の差異であると考えた。異なる時空間における「かたち」をそれぞれ要素と考えた時の、時空間を挟んで生じる差異が織りなす関係性を時間として捉えたわけである。

ところで、ある瞬間の「かたち」というものをどの様に認識するのであろうか？まず、認識すること自体が脳の所作である。これは「誰もいないところで木が倒れた場合に音が存在するのか？」という命題でも議論した。では、脳は一切の時間を除いた瞬間を認識できるのだろうか？この答えとしては「できない」と言わざるをえない。脳の働きに時間が要求されるからだ。脳は神経ネットワークとして働いている。神経細胞のはたらきとは、端的に言えば電気信号を次に伝えることであろう。特定の神経細胞に入力された刺激が次の神経細胞に伝わり……を繰り返した結果として情報が成立する。この過程に「瞬間」はありえない。一時たりとも時間を止めることはできない。まあ、こんな難しいことを言わなくても、「はたらき」には時間が不可欠なのは明らかことだろう。だから、「かたち」を考えている時の脳は、現実には存在しえないある仮想瞬間における構造を固定した上でそれについて考察している。この仮想瞬間における「かたち」は現実には存在したものではなく、あくまでも脳が作り上げた仮想の「かたち」である。それを現実には存在する「かたち」であると錯覚しているのは己の脳で認識しているからであろう。時間経過に反してその「かたち」に何も変化を起こさなければその「かたち」に関しての「時間」は経過していないが、それを認識する脳の働きとして明確に時は刻まれている。

現実には、特定の瞬間の存在する「かたち」を認識することはできない。認識しようと試みた瞬間の「かたち」と認識した瞬間の「かたち」とが同じである保証はまったくないのだから。なので、何かの現象を解析している場合にも、観察者はその瞬間

の「かたち」を見ているつもりであっても、経時的に「かたち」を観察し続けているにすぎないのである。常にインプットがされ続けていると考えると分かりやすいかもしれない。「かたち」の変化を時間としたが、ただ漫然と変化をする状態に対して、周期的な変化を考慮する必要もある。これは変化を繰り返しながら元の状態に戻り新たに同じ変化を繰り返す。ただし、厳密に言えば元の状態には決して戻りはせず、元と厳密に同じ変化を繰り返すことはありえない。これは螺旋階段を思い出して頂ければ分かりやすい。「かたち」を考える場合に私たちは螺旋階段を上からだけ見ている。しかし、実際には一つの周期が終わった時には一つ階が上がってしまっている。元の「かたち」と厳密に同じものは既に存在せず、常に新しい時空間の「かたち」を我々は「繰り返し」見ているわけである（図 10）。

短い時間感覚はかたちの変化によって認識できるのだが、長期的な時間感覚を我々が認識するにはその変化に周期性が必要とされそうである。川の流れをもって時間の移ろいを知る。しかし、その水は海に流れ込み蒸発して雲となり山に雨を降らせてまた川へと戻る。ガイア思想は地球を生命体であると説く。これは生命の定義をどう置くかによって議論は分かれるところだろうが、一つの閉じた体系として成立し、増大するエントロピーを外部に放散することによって己の体系を安定に閉じさせているという意味においては生命体と呼んでも差し支えない様思う。とにかく体系（システム）として閉じるこ

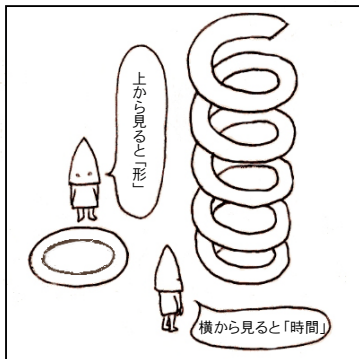


図 10. 時間のかたち

とこそ重要であり、閉じないシステム（これは語義矛盾であるが）はすぐに破綻する。したがって、我々が認識するさまざまな変化も、大局的には必ず閉じているはずである。体系が閉じていることはすなわち何らかの周期性を意味する。したがって、閉じた体系の一部分の変化をみればそこに短い時間を認識できるが、その体系としての周期性を認識する時に恒久的な時間の感覚を得るのであろう。日が昇り日が沈むことで一日という時間を認識し、四季の変化を通じて一年という時間を認識する。生き物は必ず体内時計を持っているし、それは日周期に限りなく近いし、時計の針が回って時間を示すのもあながち偶然ではないのかもしれない。

「かたち」を考えるには時間を排除しなければならない。しかし、個人の脳が時間を止めることは不可能である。時間を止めようとするれば、もう脳の動きを止めるより他に方法はない。脳の動きを止めると観察者は死んでいるので認識そのものができない。したがって、そこには時間もないが、同時に「かたち」も「はたらき」も存在しえない。だから実際には脳が仮想的に時間を止めて「かたち」を認識しているにすぎない。現実の世の中から「かたち」のみを抽出しようとするれば時間を排除する他になく、脳による認識が時間を必要とする以上、現実的にこれは無理であり、さりとて時間のみを抽出しようとする場合にも、連続する「かたち」の変化として時間を捉えるにはある瞬間の「かたち」を規定する必要があるために自己矛盾を生じさせる。この辺りに、「かたち」を考える難しさが存在するのだろう。

「はたらき（時間を伴う情報）」は聴覚の情報処理系により、「かたち（時間を止めた情報）」は視覚の情報処理系に依存すると言われ、脳の中でこれら二つの情報処理を担う領域は物理的に離れているために、現象の表裏である「かたち」と「はたらき」を同時に認識することはできないと言われる。メロディーも「かたち」であるとしばしば言われる。個々の音符を見てもその音としての意味以上の何もないが、それらが連続的に並んだときに、時に心を打ち、時に勇気づけられるメロディーとしての意味を持つ。要素の集合以上の意味を持つ「かたち」である

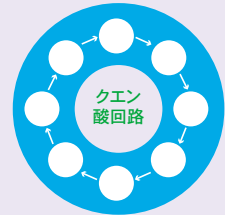
「クエン酸回路を考える」

生きものが糖分を分解する過程で2炭素からなるアセチル CoA という物質ができる。これが4炭素のオキサロ酢酸と結合して6炭素のクエン酸が生じるところからクエン酸回路は始まる。図に示す様に、種々の酵素の働きによって1炭素のCO₂（二酸化炭素）を回路外に二回排出しながらクエン酸はイソクエン酸→ α ケトグルタン酸→→→マレイン酸を経て、元のオキサロ酢酸へと「かたち」を変えて回路は一周する。この時、2個の二酸化炭素によって排出される2炭素は、アセチル CoA から獲得したモノではなく元のオキサロ酢酸が持っていた4炭素の内の二つであることから、回路を一周回った後に生じるオキサロ酢酸やクエン酸などは厳密に言えば元のオキサロ酢酸やクエン酸とは異なるモノである。鴨長明は「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」と言ったが、まさにクエン酸回路においても同様であった。

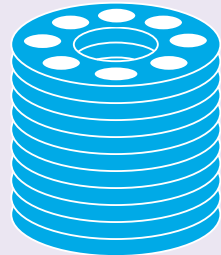
さて、クエン酸回路というくらいなので図示すれば回路の「かたち」を描く。しかしながら、これらの化合物や酵素はすべてミトコンドリアと呼ばれる細胞内小器官の溶液中に乱雑に混在しているにすぎない。決して回路状に円を描いて存在するわけではない。解糖系から産生されたアセチル CoA とオキサロ酢酸がたまたま存在したところにたまたまクエン酸合成酵素が存在して第一の化学反応が起こる、ただそれだけのことであり、同様のことが回路上のすべての化学反応に起こっているにすぎない。しかしながら、それぞれ独立して存在する化合物や酵素がバラバラに行なう化学反応が一つの関係性を構築しており、それを紙に描くと回路上に閉じる円の「かたち」となるという事実は、「かたち=関係性」であるという図式を考えると示唆的である。

クエン酸回路を「かたち」として考える場合、無意識に我々は時間を止めている。だから、同じ「かたち」をした化合物はすべて同一のモノとして扱い、そこに差異を認めない。回路を何周してもクエン酸はクエン酸であり、それは同一のモノとして認識されているのである。本文中でも議論したが、差異のない二つのモノは独立して存在しえない。だから、クエン酸が何分子存在しようが、そのクエン酸が回路を何周回ったものであろうが、クエン酸として一つの存在として扱う。だから、クエン酸回路上にはクエン酸は一つしか描かれないのである。

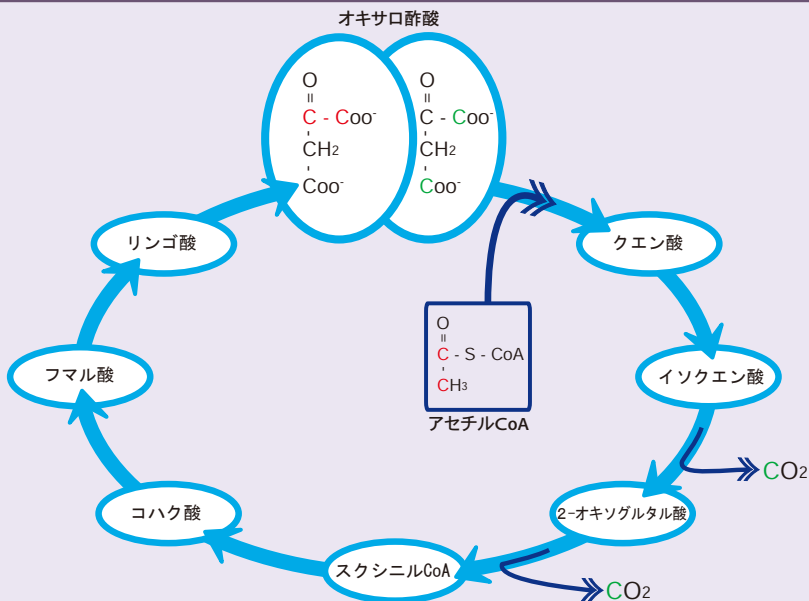
もし、時間軸を取り込んだらクエン酸回路の「かたち」はどうなるのだろうか？では、ほんの一瞬だけ時間が進んですべての化学反応が一段階だけ進んだ時を考えてみよう。クエン酸回路の「かたち」は一瞬前と何も変わらない。しかし一瞬前のオキサロ酢酸とアセチル CoA が一瞬後のクエン酸となっている。この様に、一瞬の時間を考えた瞬間に異なる時空間の「かたち」は互いに異なる。もし「かたち」が互いに異ならないのであれば、それらは異なる時空間上に独立して存在するのではなく同一時空間上の同一の「かたち」として認識され、したがってそこには時間は存在しない。この様に限りなく瞬間の「かたち」を微分的な時間経過としてミルフィーユの様に重ね合わせていくとクエン酸回路は円筒状に長くなる。これは、丸山圭三郎の「面の歴史」の考え方にも似ているかもしれない。この考え方で特に注意を要することは、「面」すなわちその瞬間の「かたち」を認識するのはあくまでも脳の仮想的な作用であるということで、脳が勝手に時間を止めて考え



クエン酸回路の「かたち」
矢印は描かれているが時間は止められている。

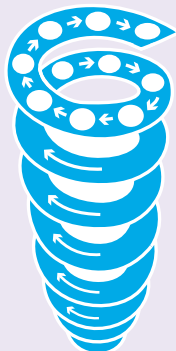


異なる瞬間におけるクエン酸回路の差異が積み重なることで時間概念が生じる？



でも、その考えている間に脳は働いている。だから、認識する対象がその間に変化をしていないという保証は一切ありえない上に、脳自身もその間に変化していないと言い切れないのである。なぜなら、何かを認識したことは、認識前と認識後では脳の状態が変わっているのだから。

では、時間は連続している立場をとればどうなるのであろうか？時間軸を無視すれば化合物や酵素などの「要素」の存在は前提となるが、時間軸を考慮に入れると、すべての化合物は酵素によって基質から合成されなければならない。クエン酸は、回路を形づくる構成要素としてそこに存在しているのではなく、オキサロ酢酸とアセチルCoAからクエン酸合成酵素によって合成されるものなのである。したがって、仮に一分子ずつのオキサロ酢酸とアセチルCoAから回路が始まり、それ以外の化合物がそこには存在しないとすれば、新しいクエン酸ができたならそこにはもはやオキサロ酢酸は存在しないことになる。しかしながら前述した様に、一連の化学反応を辿っていくと元と同じ化合物であるオキサロ酢酸が作られる。しかし、この化合物は一周前のオキサロ酢酸とは構成原子の由来が異なるのでまったく違ったモノとして認識されなければならない。したがって、回路は閉じるのではなく、螺旋階段の様に新たな周期に突入すると考えざるをえない。本文中でも述べた様に異なる時空間における単純な差異を時間として捉えることもできるが、この様に螺旋階段のような周期性によって時間が規定されることはきわめて興味深い。



クエン酸回路は回り続けるが、同一円周上を回るのではなく、少しずつ異なりながららせん状に回っている。

とされるのである。メロディーに移調の操作を加えても元の曲名は変わらないし、当然だが、一つ一つの音符に分解した瞬間にゲシュタルト崩壊を引き起こす。さて、メロディーには時間経過が必要である。それは音符に時間が含まれていることを考えると分かりやすい。ベートーベンの交響曲「運命」は八分休符から始まる。曲の最初に八分休符があることから、それをいかに表現するか指揮者によってさまざまであるらしいが、なんにしても「無音」の時間も音楽には含まれるのである。このメロディーを認識するのも聴覚の仕事である。それと「かたち」にどの様に折り合いを付けるのか。おそらくメロディーを「かたち」として認識する場合の思考経路は、楽譜（に類するもの）を脳の中に浮かべているのだろう。メロディー自体は連続した音の変化であり、それをそもそも要素としては切り離すことはできずやりにくい。どこからどこまでの音が単一の要素として切り出せるかは、音譜の認識を持たない限り無理だろうと思う。結局の話、メロディーを視覚情報として認識すれば楽譜に書くような（実際に楽譜に書かなくても構わないが、頭に音符を思い浮かべようような）認識をとるしかないのではなからうか？これは、認識を脳のどの領域で行なうかに依存することと考えられる。たとえば、失聴症の患者は普通に会話をすることができるという事実は、言語という論理体系を視覚情報として処理することができないために文字を読むことができないが、聴覚情報としては問題なく処理することができるので会話に支障はないのだろう。

量子力学から出てきた考え方は、「関係のネットワーク」が素粒子の世界であり、粒子と波は、唯一無二の実態を相補的に描写する概念にすぎない」である。だから、「一方の概念を物理的な対象とすれば、もう一方の概念は不確定にならざるをえない」となる。すなわち物質粒子は、それが分離された途端に抽象概念となるわけで、結論としての粒子の性質というものは、他の粒子との相互作用を通してしか定義・観察されないのである。この考え方はまさに「かたち」「はたらき」「時間」を言い表わしているようにも思える。

おわりに

思索を表現する方法論が言語しかないので言語の中に生じる論理体系であると考えられがちであるが、言語体系を超越して脳の中に形成されている論理体系として思想は認識されるべきものであろう。違う言い方をすれば、自分の持つ言語とは異なる言語とでも言おうか。思想の成立には言語体系が必須の様にも思われるが、本質的にはそうではない。純粹論理体系としての思想は、単語やその定義などは己の言語体系を拝借するのだが、それらを論理として組み上げる時には、新たな言語体系を創造するのと同じ過程を踏むはずである。したがって、できあがった思想は自己の持つ言語体系から飛び立ってしまうし、それ故に己の思想を己の言語で明瞭にかつ的確に表現することは困難なのである。

これはおおざっぱに見て翻訳に例えられるかもしれない。翻訳書が非常に読みづらいことを経験したことがあると思う。私は決して英語が得意ではない。一冊の本を読むために数え切れないくらい辞書を引く。だから、日本語よりもかなり読む時間はかかる。しかしながら、翻訳書を読むよりも原書を英語で読む方が早く読めてかつ理解が深いのである。翻訳書は、限りなく原文に忠実に訳さなければならない。可能な限りの逐語訳が要求される。「意味がとれればそれでいい」ではマズイのである。その著者の文体や表現方法をできる限り訳文に反映させなければならない。そうしても、原文の表現やニュアンスはほとんど残らないだろう。これは日本語と英語の場合だけでなく、英語とドイツ語の場合でも、あるいはフランス語とドイツ語の間でも同様だ。英語の論文を書き、それと同じ内容の日本語の雑文を書くこともある。その時、同じ著者が書くにもかかわらず、二つの文章はその構成から文章の流れや表現までまったく別物になる。片方の訳文を載せることなどありえないし、明らかに時間がかかる上に読みにくくなる。

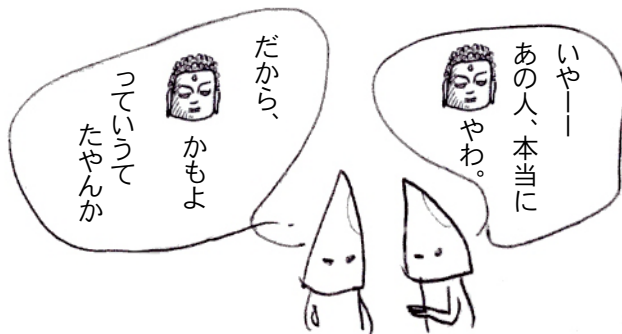
だから、哲学書が難しいのは当然のことで、その本人にとっては自明の理であることすら、他人に理解してもらうためには言語を尽くして表現しなくてはならない。しかし、言語体系とは異なる論理

体系が脳の中に成立した場合、それを言語に翻訳することが困難であることは論を待たない。「数学者は話すのが苦手である」とよく言われる。その理由として、数学で使う脳の領域が言語の領域とまともにかがっているからだそうだ。数学は、言語と同様にきわめて純粋な論理体系であるのだから、これはとても納得できる。構造論を最初に提唱したソシュールは、一般言語学を三回講義した後に完全に沈黙してしまった。これは、己の脳に築き上げられた論理体系はソシュールにとっては自明のことであるけれど、それを言語の体系に翻訳し直すことに限界を感じたからなのかもしれない。数学の論理は数式で表現すればよいが、思想は言語で表現するしか他に方法はない。この辺りに哲学を理解する難しさがあるのだろう。数学の論理を、加減乗除やルートに微分積分など数学の論理体系をまったく使うことなく言語のみで表現することはたして可能なのだろうか？ 思想を言語で表現することは、数学を言語で表現することに近いとも言えるくらいに困難をきわめるのではないのだろうか。

仏教の根本思想、あるいは仏教思想の世界観を表現するものとして曼荼羅まんだらがあげられる。分かる人にはきわめて明快であり、これ以上何を説明するかと言えるほどのものなのだろう。また、おそらく森羅万象の関係性が曼荼羅には明快に描かれているのであろうが、私のような凡人にはまったく五里霧中の世界へと誘われてしまう意味不明の紋様でしかない。では、なぜ偉い人たちはこれをもっと誰にでも分かる様に描きあらためないのであろうか？ それはおそらくできないのである。曼荼羅に説明されている関係性を言語に写し取ることはできないからこそ、己の脳みその中にその「かたち」が構築されるまでの間は仏教の世界観を何人たりとも理解できないのである。そして、己の脳みそにその「かたち」を確立した時には、その人にとっては曼荼羅が指し示す世界観は自明のこととなるのだが、たとえ己がそれを会得したあとであっても、まだそれを会得していない人に対して教えることは非常に難解なのであろう。

「かたちの議論」はこれで終了する。これを

踏まえて生きものの「かたち」について議論を深めるつもりでいる。遺伝子という要素によって形づくられるゲノムがあり、細胞という要素から個体は生じ、個体から集団は生じる。また、発生にも進化にも時間軸が重要である。この時間の中での遺伝子が持つ意味などを考察しながら、生きものの形を新たな目線で議論していく。



意味がわからない

2008年7月24日発行

著者 橋本主税 (hashimoto@brh.co.jp)

発行者 はしもちと愉快的仲間たち

図版 阜裕美

公式webサイト はしもちの「かたち」を考える会 (<http://www.hashimochi.com>)